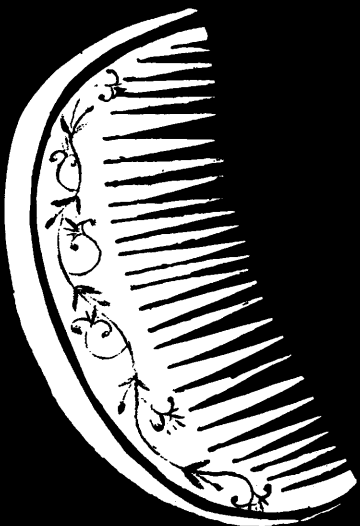


JGR
Level E

木蘭

はやし
おへ



原作 芥川龍之介「葎の中」
あぐだあむしゅうのうけ 中島 健

原画 酒井眞智子
あゆみ まちこ

挿絵 馬越 智子
あいえ うまこじ とおこ

この日本語版グレイディド・リーダーはJGRプロジェクトグループが開発した試作品です。販売を目的としたものではありません。

© 2006 by JGR プロジェクトグループ

がやったのだ。」と言っているのです。

多襄丸が本当のことを言っているとしたら、真砂や金沢武弘はどんな人達
でしようか。嘘をついてなにを隠そうとしたのでしようか。

真砂の話が本当だったら、多襄丸と金沢武弘の話は……。そして金沢武弘
の話が本当だったら……。自分の命よりも大切なこと、守らなければな
らないことは三人にとってそれぞれ何なのでしようか。

暗い林の奥、そして人の心のずくと奥にあったことは……。

ねわり

京都の北には山があります。

そして、その山のもっと北には

海があります。京都からその海まで

大きい道があります。それは人々が

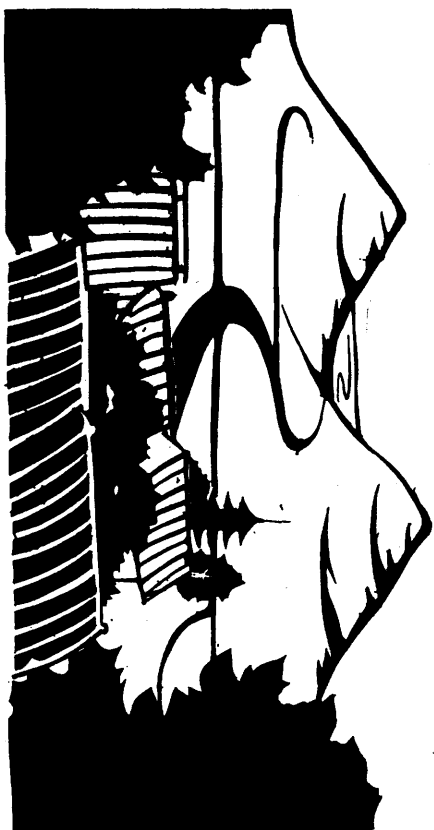
海で取れた食べ物やめずらしい物を

京都の町へ運ぶ時、

北の町の人が京都の新しいことや、

大切なことを知るために行ったり来たり

する時に通る道です。



もちろん京都は国の一番大切な町ですから、この北へ行く道だけではなく、
たくさん道の西へ、東へ延びていました。このように大きな町と町を結ぶ
道を街道と言います。

ある日、この北の街道の近くの山で働く人が男の死体を見つけました。
この人は山の木を切るのが仕事です。建物や橋を作るための木を切るのです。
この仕事をする人を木こりと言います。この木こりは死体を見つけると急い
で放免に知らせました。放免というのは今の警官と同じような仕事をする人
です。放免は死体を調べてみて、この男は誰かに殺されたようだったのだ
で番所に知らせました。番所と言っているのは今の警察と同じ様な所です。番所で

-2-

「私は何も分かりません、何も覚えていません。」と言って帰ってしま
いました。

番所は静かになりました。事件のすぐ後には、近くの人が侍の死体や
多襄丸を見ようと集まって来たり、ひそひそと話したりしてうるさかったの
です。でも今はもうそんな人もいなくなつて何もなかったような様子です。

しかし、本当のことはまだ誰にも分かりません。多襄丸、真砂、金沢武弘、
この三人の中の誰が本当のことを言っているのでしょうか。一人が本当のこ
とを言ったのなら、他の二人はどうして嘘をつかなければならなかったのだ
でしょうか。それも、「私が殺したのではない。」と嘘をつくのではなくて「私

-79-

私は死ぬのだと分かりました。

その時、誰かが私の方へ近づいて来るのが分かりました。誰なのだろうと目を開けてよく見ようとしたが、影がすっかり私を包んでしまつて暗く

ても見えません。

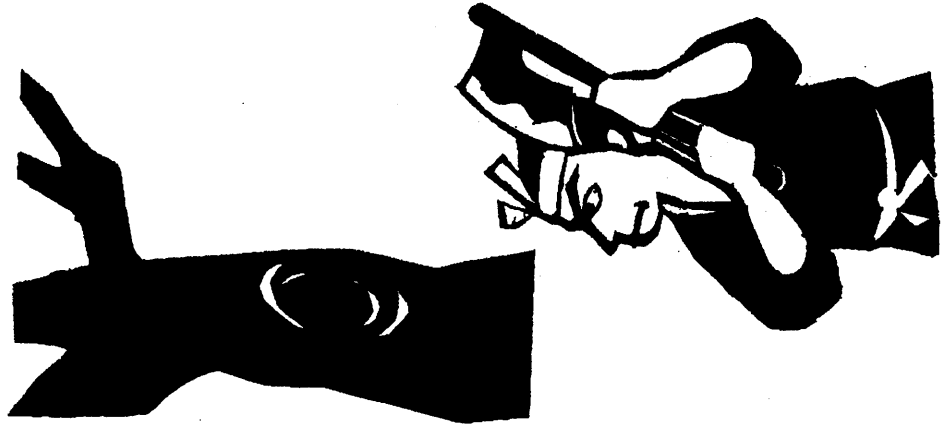
その誰かが私の胸から刀を取りました。するともう一度口の中が血でいっぱいになりました。それからどんどん暗い所へ落ちていくような感じがして、何も分からなくなりました。」

そこで巫女は話し終わって、ぱったりと倒れました。しばらくして起き上がりましたが、番所の侍達がいろいろ聞いても

は侍が警察の仕事をしています。侍は簡単に言うと言や町の人々のために仕事をします。番所の侍は死んだ男の人が殺されたのかどうか、事故で死んだのかもと詳しく調べるために、いろいろな人から話を聞くことになりました。話を聞くために番所に呼ばれたのは五人です。死体を見つけた木こり、この男が生きている時に街道で会ったお坊さん、泥棒を捕まえた放免、殺された男の妻の母親、泥棒の多襄丸です。

死んだ男の人を見つけた木こりの話

「ええつと、それは杉のたくさんある所へ木を切りに行くところでした。



-4-

私は木こりですからね、

風が吹いて木の枝が揺れています。

私の顔に風が当たって

涼しいのです。だんだん

木の影が大きくなって来て

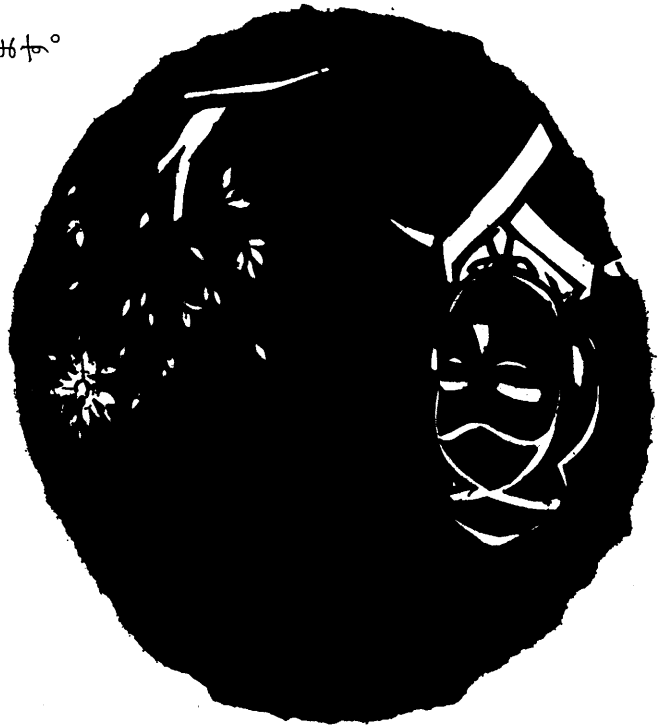
明るい空が少しづつ

暗くなってきました。

もうすぐこの静かさと影が

私を全部包んでしまうのだ

と思いました。



-77-

ら口にかがってききました。そして体を横にして静かにしていました。

だんだん胸の辺りが冷たくなってきました。風の音も木の葉の揺れる音も

聞こえませんでした。もう鳥の声も聞こえませんでした。

でもとても気持ちがいいのです。

林の上のほうを見ると

青い空が木の枝の間から

見えます。明るく光って

とてもきれいです。

音は何も聞こえないのですが、

山で木を切って町や村へ運ぶんです。

今は京都の東の方で大きなお寺を

建てていて、たくさん木が

必要なのだそうですよ。

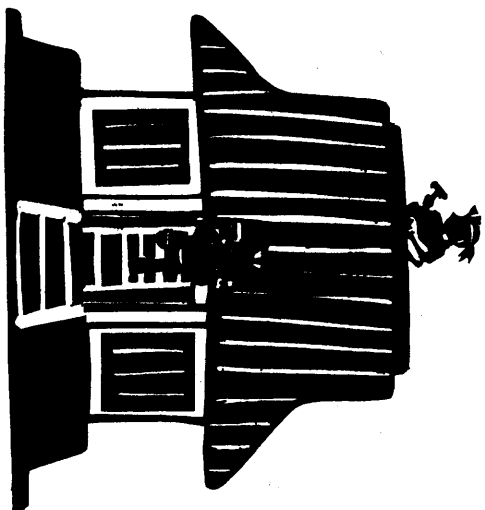
あ、いいえ、杉林の中ではありません、

男の人を見つけた場所は。街道から

山の中へ入っていくと竹の林があるんです。

その林は人がやとと通れるぐらいたくさんの竹があつて、それが高く伸びて

いるから屋でも光が入らなくて暗い所なんです。



私はいつも林の中で木を切っているのに、なんだか怖くなるぐらい暗くて気持ちが悪い所でなので、急いで通り過ぎるようにしているんです。その竹の林を通り過ると少しだけ明るい所に出るんです。そこは低い木がいっぱいある所で、お日さまの光が入ってきますから、ちよつとほつとします。私が木を切る所は、もう少し先です。杉の林があつてその中にあるんです。だけど、昨日は低い木のある明るい所で男の人を見たんですよ。初めは木の下で寝ているのかなと思つたんです。だけど近づいてみると古くなった魚のような嫌な臭いがして、大きな蠅が周りを飛んでいるので『変だな。』と思つたとたんに気が付きました。

それは私の泣き声だったのです。しばらくの間、私は我慢をしないで泣いていました。自分が泣くなんて信じられませんでした。侍は泣いてはいけないのです。でもその時は自然に涙が止まるまで泣きました。しばらくして涙が止まると、何か大変な仕事が終わつた時のように疲れてしまいました。紐は男が切つて行つてくれたのに、手も足も痛くて立つこともできないぐらいでした。でも手や足の痛みよりも心が痛かつたのです。何とか立つてみると目の前に真砂が落としていつた小さい刀がありました。それを手に取つて、残っている力を全部使つて自分の胸を刺しました。でも痛くなかつたんです。痛さ何も感じる事ができませんでしたけれど、ゆつくり熱いものが喉か

男は『これはだめだ、急いで逃げよう。ここにいると今度は俺が危ない。』

あの女、誰かに俺のことを言うだろう。』と言って、男は

私の紐を切ってくれた後で、弓矢を取って林のむこう

走って消えました。

男がいなくなると周りは急に静かになりました。

風の音と鳥の鳴く声だけが聞こえます。それから

どこかで誰かが泣いているのに気が付きました。

声はどこから聞こえるのだろうと

周りを見ましたが、誰もいません。



『あつ、この男の人は死んでいるんだ。』それで

急に足がガクガク震えてしまいました。

でも私は死んだ人を見るのは

初めてではありません。木こりは

高い木に登って切ることもあります

から、落ちて大怪我をしたり死んで

しまったりすることもあるんです。

ですから段々に落ちて着いて男の人

を見るということが出来ました。上を向いて



寝ているようでした。

男の人は烏帽子をかぶって、空色の着物とそれから袴をはいていました。烏帽子は侍がかぶる物ですから、それでこの男の人は侍なんだとわかりました。胸の所に刀のような物で深く切られたような傷がありました。そこからたくさんの血が出たらしく、空色の着物が赤黒くなっていました。お侍の周りに落ちていた木の葉にも血がついていました。」

「いいえ、刀は見ませんでした。お侍の倒れていた所に大きい杉の木があるんですが、その木の下に紐が落ちていました。

そうだ、思い出した、そのお侍からちよつと離れた所に櫛が落ちていた

ところが、男は真砂をとて乱暴に蹴つて倒しました。そして私に言いました。

『どうするこの女、このひどい女、お前の妻だが殺してやろうか。それとも助けてやりたいか。どうしたいか言ってみろ。』そう言いながら私の口から木の葉を出してくれたのです。この言葉を聞いて、私はこの男にもいいところがある、今までのことを忘れてやろうと思いました。私たちは真砂に對して同じ気持ちになったのだと思いました。

しかし気が付くと、真砂は何か叫びながら林のむこうへ逃げていったのです。驚くほど速く走って行ってしまったのです。

あの人が生きていると私は安心してあなたと行くことができません。どうぞお願いいたします、殺してください。』

『あの人を殺してください。』こんな恐ろしい言葉が妻の口から出ることを信じられる人がいるのでしょうか。この言葉が強い強い風になって私を暗い所へ吹き飛ばしました。あの時、私はもう死んだのかもしません。』

「けれども、あの男も真砂の言葉にひどく驚いて、何も言えなくなつて

しまったようです。しばらく黙つて立っていました。真砂はもう一度『殺し

て。』と叫びながら男の手を取りました。この時、私は殺されるのだと思い

ました。

んですよ。一本だけです。女の人が使う物だと思ひます。何でもんな所に女の人の櫛が落ちてゐるんだらうと思つたんです。

変でしよう、だつてあんな林の奥に

女の人は行きませんか。ね。」

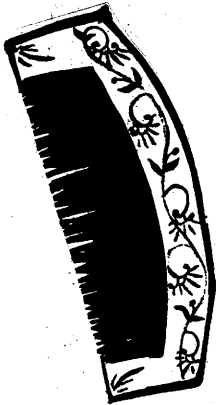
「他に気が付いたことですか、

そうですね・・・えーつと、

お侍が寝ているように倒れていたので、

それなのに周りの草や木の葉が足で蹴られたり、踏まれたり、倒されたりし

ていたんですよ。それを見ると、お侍は誰かと喧嘩をしたのか動き回つた



りしたんじゃないかと思ひます。切られて死んだのなら、苦しんでいたんでしようが．．．静かに寝ているようだったんですよ。」

「あつ、もう終わりなんですか、それじゃあ帰つてもいいんですね。ありがとございします。私がこんなことを言う必要もないことでしょうが、あのお侍はまだ若いのに死んでしまつてかわいそうです。

目が開いたら、そのきれいな目に青い空が映つて気持ちよそそに見たのではないでしようか。

もし誰かに殺されたのなら、早く殺した悪い人を見つけて下さい。」

「私ですが、いいえ、まだ仕事が終わらないので家には帰れません。この

私はもう死の世界にいるのです。それでも

この真砂の言葉を思い出すと、

激しく嫌いなのだと感じます。妻は

うれしそうな顔で男の手を取つて、

林の中から出て行こうとしたのですが、

急に何か恐ろしくなつた様子で男の顔を見ました。

『どうしたんだ。』と男が聞きました。

妻は私の方を指で指して

『あの人を殺して下さい、



いんだ、俺は。始めて見た時、お前が好きになつたんだ。本当は乱暴なこと
をしたくはなかつたんだ。俺はもつと優しい男なんだ。』

こんな嘘をついたのです。そしてこれを聞いて真砂はとても嬉しそうにあ
の男の顔を見ただのです。

私は驚きました。真砂のあんなに嬉しそうに顔を見たことがありません
でした。私は信じられませんでした。さらに真砂は木に縛られている私の前
で言いました。

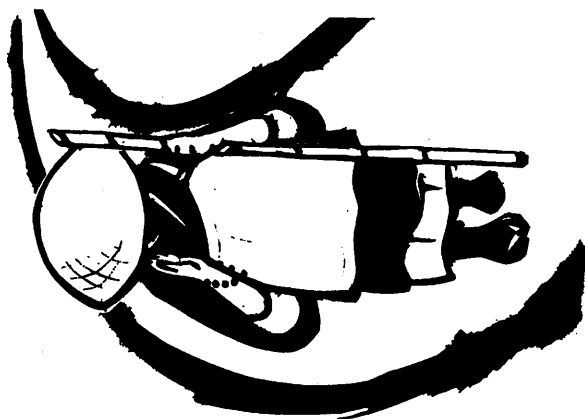
『どうぞ、連れて行ってください。どこへでも一緒にまゐります。お願い
いたします。』

仕事が終わつたら今度は南の方の山で木を切るんです。やはりこちらの大き
な町でお寺を建てるそうで……。木が必要な所はどこでも行きます。それ
が木こりの仕事ですからね。それでは失礼いたします。」

木こりが帰つた後、番所にはお坊さんが呼ばれました。北の街道を京都に向
かつて歩いていた時に、侍を見たといいです。お坊さんはお寺の人です。
お寺で人のこと、木や花や動物のこと、世の中のこと、神様のことを考え
たり、勉強したりします。それからもつと世の中のことを知るために旅をし
たりします。

山道を歩いていたお坊さんの話

「あのお侍、もまには二、三日前に会ったばかりでございます。亡くなられたんですか、とても信じられないことです。殺されたかもしれないなんて……。おかわいそうなことでございます。」



信じ始めているのです。

『だめだ、真砂、だめだ。嘘なんだからそんな話は。』

でも、真砂には私の心の声は聞こえませんでした。真砂は私の方を見ようとしません。男は私にも聞こえるように大きな声で言いました。

『一度だけでも妻が他の男のものになったら、普通の男は誰でも妻が嫌いになる。その上、自分の見ている前でそんなことになったら、妻を殺したくなるかもしれない。お前の夫は今どんな気持ちだろう。多分、嫌いになっただろうな。お前だつてもう恥ずかしくて一緒にいることはできないだろう。お前は俺と一緒にどこかへ行った方がいいのではないか。夫婦になつてもい

嘘だ。真砂、この男がどんなに優しいことを言っても嘘なんだからね。』

できる限り大きな目を開いて、真砂の顔を見ました。

私の気持ちが伝わるように

一生懸命見ました。

しかし真砂は下を向いて

私の方を見ません。

それどころかあの男の話を

じっと聞いているようです。

そして、だんだん男の話を



どうぞ静かな気持ちであちらの世界に行くことができそうですよにお祈り申

上げます。」

「はい、お侍さまに会ったのは一昨日のお昼ごろでした。会った所は

京都の町から少し離れた北の街道です。私は北の山の方から町へ向かって歩

いていました。道のそばには野菜や花の畑がありました。お二人は京都のほ

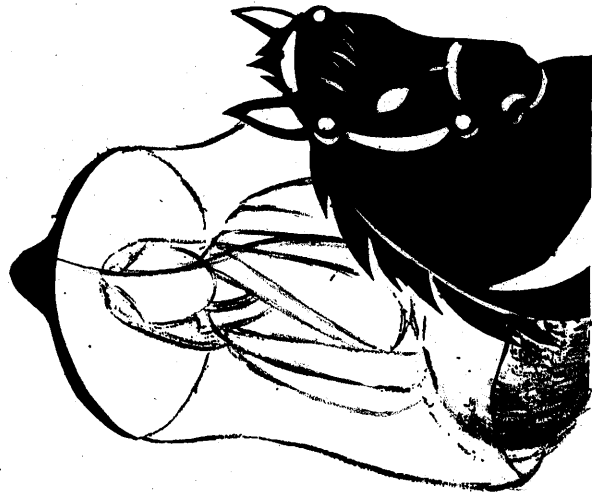
うから山へ向かっていらつしやいました。」

「はいそうです。お侍さまはお一人ではなくて馬に乗った女の人と一

緒に歩いていらつしやいました。」

「お二人の様子でございませうか。お二人を見たのは本当に少しの間だけで

すからあまりよく覚えておりませんが、できるだけ思い出してお話しします。女の人は旅行をする時の大きな帽子のような物をかぶっていました。



そして帽子の上のところから薄い布が掛かっていました。その布があるので

とても残念で、苦しくて、目を開けているのもやつとでした。でも真砂が無事ならいい、生きていればいいと思っていました。男が行ってしまった、また二人は元のように夫婦なのだから。そう思っていたのに、あの男は乱暴なことをした後で、下を向いて黙っている妻に近づいていろいろ話しかけるのです。優しくそんな声で何か言っていてまた妻をだまそうとしているようでした。私は口の中に木の葉をいっぱいに入れられていましたから、声を出すことはできませんでした。それでも、一生懸命に妻の方を見て目で知らせようと思いました。

『だめだ、こんな男の話は信じてはいけません。この男の言うことは全部』

けれど私は簡単にあの男の嘘にだまされた。林の中に古い墓があるという話にすっかり興味を持って、真砂を取られてしまったのです。私は杉の木に縛られてしまって何もできないで、ただ見ているだけでした。



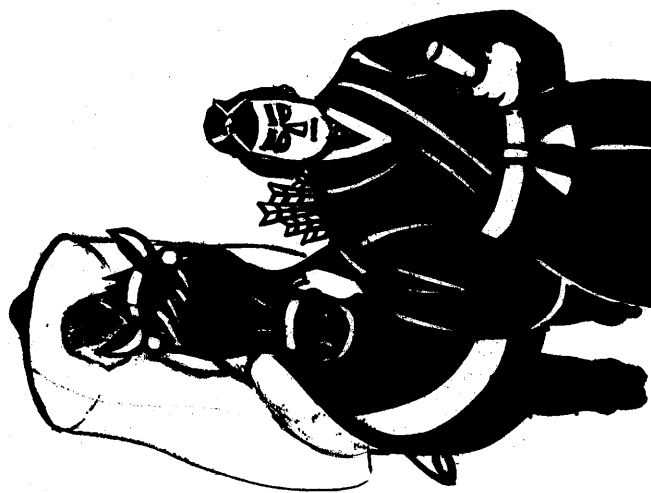
女の人の顔は見えませんでした。」

「着ている物ですが、そうでいそいますね・・・きれいな薄い緑色や黄色だっただと思います。下のほうに赤い色と紫色もあつたような気がします。

申し訳ありません、私は今、旅をしながら立派なお坊さんになる勉強をしています。いつもお寺のことやえらいお坊さんのことばかり考えて歩いているので、他のことに注意ができないのでいそいます。」

「馬ですが、馬の毛の色は少し赤い茶色でした。大きさは背中から足までが一メートルと三十センチぐらいだっただと思います。大人しそうな馬でしたよ。」

「刀かたなですか、お侍おむらいさまは刀かたなを腰こしの左側ひだりがわに付けていました。



巫女みこが死しの世界せかいから呼よんだ侍おんなの話はなし

巫女みこというのは特別とくべつの力ちからを持もっている女おんなの人ひとです。死しの世界せかいから死しんだ人ひとの心こころを呼よんで来くるのです。そしてその心こころを自分じぶんの体からだの中なかに入れて話はなしをさせることができるのです。

生きていたら話はなししたかったこと、誰だれかに知しらせたいことを巫女みこの声こゑを使つかって話はなしすのです。それでこの侍おんなの話はなしは、巫女みこが死しの世界せかいから侍おんなを呼よんで巫女みこの声こゑで話はなししたことなのです。

「あの嘘うそつきうそつきの男おとこが私わたしの妻つま、真砂まさこを乱暴らんぼうに取とってしまったのです。残念ざんねんだ

「北の方に巫女がいる。」

その巫女は死んだ人の心を死の世界から

呼んで来て、巫女の体の中に

その心を入れることができるそうだ。

そうして死んだ人が生きている時に

話したかったこと、思っていたことを

自分の声を使って伝えることができるんだそうだ。」

他の侍達もそれを聞いて、「一度その巫女を呼んで死んだ男の話を聞いて

てみたらどうだろう」と賛成しました。



弓と矢も背中にかけていました。矢は・・・、そうですね、二十本くらいあつたと思います。」

「着物ですが、確か空色だつたと思います。頭には何か黒い帽子をかぶつ

ていました。烏帽子というのですか、そうですか、名前は知りませんでした。

お顔は若いきれいな、でも弱々しい感じではなかったと思います。そのぐ

らいしか覚えておりません。何しろほんのちよつとの間だけでしたから。

申し訳ございませせん、あまりお役に立たなくて・・・。」

お坊さんの話はこれだけです。

番所を出てからお坊さんは『あんなに若くて立派なお侍もまが亡くなつ

てしまうなんて、本当に人の命は朝開いて昼には落ちてしまう花のようなものなのだなあ。生きている時間と夢の時間は同じようなものなのかもしれない。でもそれを悲しいと思うのはまだまだお坊さんの勉強が足りないからなのだろう。』などと独りで言いながら山の方へ歩いて行きました。

二番目に番所に呼ばれたのは放免です。初めにも説明しましたが、放免というのは今の警官のような仕事をする人です。

この放免は泥棒を捕まえました。泥棒の名前は多襄丸といいます。多襄丸は、京都の北山で人の物を盗んだり、刀を振り回してたくさんの人に怪我をさせたり、家に火をつけたり、人を殺したりしているので怖がられていました。

夫が『そばに来るな』と言っているのでしょうか。

『乱暴なあゝの男のものになったのだから、もう真砂は私の妻ではない。』そう言いたいのでしょうか。汚されたまま私は生きていかなければならないのでしょうか。どうやって生きていけばいいのでしょうか。』

番所の侍たちは困ってしまいました。多襄丸は「侍を殺したのは俺だ。」と言っていますし、侍の妻も「夫を殺したのは私です。」と言っているのです。しばらく迷ってどうすればいいか話し合ったり、他の番所の侍達の意見を聞いたりしていました。

すると、一人の侍が言いました。

ら取って、口の中の木の葉を出してさし上げました。それで少しでも夫が苦しくなくなるような気がしたのです。

今度は私が自分で死ぬ番でした。でも、もう力がなくなつて、死ぬことができないかつたのです。喉を刺そうと思つたのですが、刀を持つ力もないのです。立つのもやつとでした。林の中をふらふらしながら歩きだしました。足が重くて、少しでも高くなつた所には上がれませんでした。気持ちも弱くなつてしまつたのです。池があつたのですが、水の中に入る勇氣もありませんでした。

それでこのようにまだ生きてゐるのです。

ですから捕まつたと聞いた人々は驚き、そして喜びました。

多襄丸を捕まえた放免の話

「多襄丸を捕まえることができたのは運がよかつたからなのです。あの男は怪我をしていましたからね、馬から落ちたようであつたのです。骨でも折れてゐるんですよ。」

あの泥棒は、北の街道を旅する人から荷物を取つていたんですよ。あそこは京都から北山の向こうの海の町まで続いている道ですから、大切な物が運ばれます。多襄丸は力も強く乱暴ですから、人の荷物を取るのには簡単でした。

その上、頭がよくて走るのが
 速かったのになかなか捕まえられ
 なかったんです。昨日は、近くの村に
 住んでいる人が誰か怪我をして
 動けないでいるから見てくれと
 知らせて来たんです。それで、行って
 見ると村の近くの橋の上で怪我をして
 苦しんでいる男がいたんです。顔を
 見て驚きました。



夫の胸のあたりを着物の上から力いっぱい刺しました。刀がどこを
 刺したのか、夫がどうなったのか分からないうちに、気が遠くなってい
 ました。気が付くと、夫は息をしていませんでした。死んだのです。胸の所
 には私の小さい刀が刺さっていました。夫の青白い顔に西日が当たって
 いました。風が吹くと木の葉の影がゆれて、なんだか夫は生きてい
 るように見え
 ました。

殺してしまったのに、私は夫のきれいな顔を見てほっとしたのです。変な
 気持ちです。でも急に悲しくなりました。涙が出てきました。声を出さな
 いように泣きました。泣きながら体を縛っている紐を切りました。刀を胸か

捕まえようと思つてもなかなか捕まえることが
 できなかった多量丸だったんです。ずいぶん
 汚れた着物を着ていましたよ。
 紺色だったと思います。
 刀を持っていました。古いけれど
 よく切れそうな刀でしたよ。
 それから弓と矢も持っていました。
 弓には革が巻いてあって、りっぱな
 物でした。矢は十七本ありました。



それで私の小さい刀を使ふことにしました。
 胸の所から小さい刀を出して、
 『ではあなた様の命を取ります。
 そしてその後で私も死にます。
 待つていてください。一緒に
 死の世界へ参りましょう。』
 と申しました。夫は何も言えませんでした。
 私には分かりました。『早く殺せ』
 そう言いたかったのです。

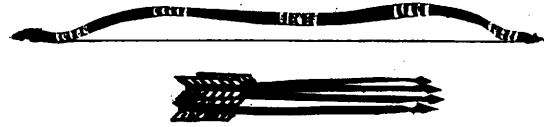


きれいな鳥の羽がついていました。

これは多襄丸の物ではない

と思いましたよ。きつと誰かから

盗んだに違いないですよ。本当に悪い男だ。」



「はい、馬もいましたよ。桶のそばで草を食べていました。色は少し赤い茶色でした。その馬から落ちたのかな。たぶんその馬も多襄丸が誰かから盗んだ物なんでしょう。盗んだ馬から落ちて大怪我をして捕まってしまうなんて、はっ、はっ、はっ、悪いことをすればいつか悪い結果が返ってくるんじゃない。」

されるところを見てしまいました。こんな恥ずかしいところを見られたのです、どうぞあなた様も死んでください。武弘様が生きていては、私は安心して死ぬことができません。お願いでございす。どうぞ死んでください。』

私が一生懸命頼んでも夫の目はやはり冷たいままです。また先ほどのように、冷たい氷の光が胸を刺して痛むのです。本当に血が流れているのではないかと思うぐらい痛かったのです。夫に死んでもらわなければ、この痛みは無くならない。そう思つて夫の刀を探しました。しかし刀はありませんでした。弓矢もありませんでした。

多分あの男が持つて行つてしまつたのだでしょう。間違いありません。

そのまま、どのぐらい時間がたったのか分かりませんが、気が付くと、青い空が林の上に明るく見えました。小鳥がきれいな声で鳴いていました。

すぐにはどこににいるのか分かりませんでした。何が起ったのか思ひ出して、急いであの乱暴な男を探したのですが、どこにもいません。でも夫はまだ杉の木に縛られたままでした。さっきと同じように冷たい目で私を見ているのでございませす。その目が私の悲しさ、恥ずかしさ、悔しさをもう一度感じさせてくれました。私は武弘様に大声でお願いしました。

『もう武弘様とは一緒にいられません。このようなひどいことになってしまつて、私には死ぬことしかできません。武弘様は私がああな乱暴な男に汚

「お侍さま、京都には他にもたくさん泥棒がいます。でも多襄丸はそ

の中でも一番悪い泥棒だと言つてもいいからです。

この男は女の人に乱暴するのが好きなんです。

去年の秋でしたが、

京都のお寺に來た若い母親と

その赤ん坊が殺されたことが

あつたんです。多襄丸が

その場所から逃げて行くのを

見た人がいます。



母親は乱暴されても赤ん坊を守ろうとして、刀で切られたようです。胸に小さな赤ん坊を抱いて死んでいる様子は、本当にかわいそうでした。いろいろな事件を見ている私でも涙が出てしまいましたよ。昨日、仲間の放免がお侍さんの死んでいるのを見たと言っていました。多襄丸が持っていたのはそのお侍さんの弓と矢ではないのでしょうか。前の日には女の人と一緒にだつたそうですね。多襄丸がやつたのだつたら、厳しく調べて女の人を探してください。私も急いで山の方へ戻って探してみましよう。」

放免が帰った後、番所に呼ばれたのは中年の女の人でした。この人は死んだ侍と一緒に歩いていた女の人のお母さんです。

男のものになつてしまつた。もう汚れてしまつたんだ。

私のそばに来るな。』

夫の目はそう言っていました。

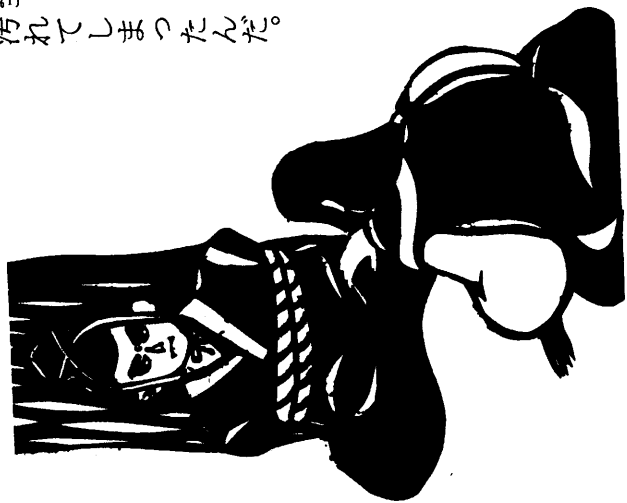
夫はもう私のことを

かわいそうだと思つていません。

悲しんでもいません。

氷のように冷たい光が

私の胸を深く刺して、その激しい痛さで死んでしまつたように何も分からなくなりました。



一生懸命に止めさせようと戦ったのですが無理でした、私の力では。男の大きな手の中の小さな虫のようなものでした。虫を動けなくするのは本当に簡単だったんでしよう。男はにやにや笑いながら夫を見ました。『どうだ、悔しいか、残念だらうな』と言っているようでした。

夫は口の中に木の葉を入られていて、木に縛られていたのですから、何も言えませんが、体を動かすこともできませんでした。私は夫のそばに走っていったのですが、乱暴な男は私を足で蹴ったので転んでしまいました。とても痛くて涙が出てきましたから、思わず夫の顔を見上げました。けれどその時夫の目は冷たい氷のように光ったのです。『真砂、お前はその汚い

番所の侍は持ち物に書いてあった侍の名前から、知っている人を探したところ、侍の妻の母親が京都に住んでいることが分かったのです。

侍と歩いていた女の母親の話

「そうでございます。あの方は武弘様でございます。去年私の娘と結婚した武弘様です。どうして・・・どうしてこんなことになったのでしょうか。娘は、娘の方はどうなったのでしょうか。死んだのでは・・・。」
娘の夫が亡くなったのですから、すぐには落ち着いて話すことができませんでした。しばらくして番所の侍の質問に答えて話し始めました。

「はい、あの方は金沢武弘様でございます。いいえ、京都の方ではございません。北山の向こうの若狭の国の侍でございます。

年は二十六歳でございます。

金沢家は若狭ではとても古い立派な家で、お父様は国の大切な仕事をなさ
つていらつしやいます。

武弘様も優しく、真面目な方です。娘もそう言っております。お友達も
たくさんいて誰も悪く言う人はいません。刀も上手に使える方でした。でも
刀を使つて喧嘩をしたり、人と競争したりすることが嫌いなようでした。
それで、刀の試合の時など気持ちが優し過ぎてどうしても勝つことができな

で会わなければ……。」

そう言つて金沢武弘の妻は泣き出しました。しばらく泣くのを黙つて聞いて
いた後、番所の侍はどうして夫を殺したのか話すように言いました。

「男は古くて汚れた着物を着ていましたが、前には侍だつたと言つていま
した。たぶんそれは嘘だろふと思います。今は分かります。

その時は夫と一緒にいたから、あの男に疑いを感じませんでした。け
れども悔しいことですが、あの男はとても頭がいいのです。私たちは簡単
に男の嘘の話を信じてしまつたのですから。

乱暴な力と、嘘の話で男は私を夫から取つてしまつたのです。

「どちらの言っていることが本当なのだらう。」と悩んでしまいました。「とにかく、その女を二に呼んで話を聞いてみよう。」という一になり、金沢武弘の妻が番所に呼ばれました。

清水寺にいた金沢武弘の妻の話

「わたしは夫を殺してしまいました。夫の名前は金沢武弘と申します。若狭の侍でございます。どうして殺したのかお話しします。その後で私も死にます。あの汚くて乱暴な男が悪いのです。あの男に会って、あの男が嘘をついたから私は夫を殺すことになってしまったのです。あんな男に街道

いのだそうです。娘はいつも残念だと言っていました。」
「娘でございますが。娘は真砂と言います。歳は十九歳でございます。小さい時から元気で気が強く、主人も真砂の兄達も『真砂は男の子だったらよかったのに』と言っていました。

武弘様との結婚の時も、他の娘さんたちは御両親が決めた方と何も文句を言わずにお嫁に行きますのに、真砂は自分で決めたのですよ。お友達のお兄様の出られた馬の競走会で会ったのだそうです。

娘はその競走会から帰って、武弘様と結婚したいと申したのです。私は驚いたのですが、どうしたことが、武弘様も面白く娘さんと気に入っ

てくださつて、とうとう結婚することになったのが去年でございます。

本当に幸せそうな一人でしたのに……」

母親はまた思い出して泣き出したため、話すことができなくなりました。

「すみません。娘のことが心配でございます。はい、顔は卵のような形で小さいです。」

番所の侍は林の中に落ちていた櫛を母親に見せました。

「ああ、それは真砂の櫛です。どこで……。結婚する時に私があげた物です。一昨日京都から若狭に帰る時、付けておりました。

一人は若狭に住んでいるのですが、武弘様が仕事のためにしばらく京都に

しばらくしてその妻が見つかったと言う知らせが来ました。

清水寺で肩を落として座っていたのだそうです。

お寺の人が話し掛けると急に泣き出して、

「夫を殺してしまった、私も死にたい。」

と言っているらしいのです。

驚いた寺の人が番所に知らせて来たのです。

侍たちは、金沢武弘の妻が無事に見つかつて

よかつたと思つたのに、今度はその妻が

夫を殺してしまったと言っているのですから



「だけど……もう話す必要はないな。」

「刀と弓矢はどうしたのかって聞くのか。それは馬に乗って逃げようとする前に捨てたんだ。」

これで全部だ、俺の話は。嘘はない。俺はいつかは捕まって、首を紐で縛られて木の枝から下げられるんだ。嘘をついても仕方がない。怖いものも何もない。」

多襄丸が侍を殺した。番所の侍はこれでこの殺人事件は終わったのだと思いました。

しかし金沢武弘の妻はどうなったのでしょうか。

来ていらっしやいました。娘も一緒でした。仕事が終わって若狭に帰るといふでございしました。

武弘様が亡くなってしまうって、真砂は生きているのですよ。どうぞ娘を探してください。何かあっても娘が生きて私達の所へ帰って来ることを願っています。」

真砂の母が泣きながら帰って行くと、番所には泥棒の多襄丸が連れてこられました。大怪我をしていて歩くのも大変そうです。

多襄丸の話

「痛い、痛い。俺が馬から落ちるなんて何ということだ。こんなばかごとになるなんて。あの馬は俺を乗せるのがどうしても嫌だと言っているようにひどく騒いだんだ。だけど、今まではどんな馬でも俺の言うことを聞いて、大人しくさせる自信があつた。それなのに気が付いたら落とされていたんだ。いたたたた……。あの馬は乗る者を選んでるみたいだ。」

「そうだよ、あの侍を殺したのは俺だ。本当だ。でも女は知らない。どこかへ行ってしまった。殺してはいない。」

どうして侍を殺したか、ようし、聞きたいのなら話してやる。

そうか、女は誰かに助けてもらおうと思つて、今ごろ町の方へ行つたのかもしれない。このままここにいたら放免や町の男達が俺を捕まえようとして来るかもしれないぞ。危ない、危ない。

そう思つてすぐに自分の刀と

侍の弓矢と刀を取つて

街道の方へ走つて行つた。

ここから北の山の方へ逃げようとするぞ、

あの女の馬がのんびりと道の草を食べていたんだ。

急いでこの馬に乗つて逃げようと思つた。



ところが、さあ一緒に行こうとすると、女が

いないんだ。周りを見てもどこにも

いないんだ。杉の木の反対側を見ても

竹の林の暗い方を見てもいない。

走る音でも聞こえるかと思つて

静かにしてみたが何も聞こえない。

侍の喉がこもる言っている。

それだけが聞こえる。その音も段々小さ

くなっていく。もうすぐ死ぬのだらう。



一昨日の朝、天気がいし、涼しい風が吹いていて、俺はなんだかひどく気分がよかった。そんな時に、あの二人に会ったんだ。」

「どこでかつて。京都の北へ行く街道だ。女は旅の笠をかぶっていて、その笠の上から薄い布を掛けていたから、顔が全然見えなかった。

一人が俺の方に近づいた時、急に風が吹いてその薄い布がふわふわと上がつたんだ。それでちよつとだけ女顔が見えたんだ。すぐに風が止つたからあつと言つ間に見えなくなつてしまつた。あの風が吹かなかつたら女顔を見ることもなかった。

だけどその顔は女の神様のようだった。女神様だぞ。女神様は侍でも、

俺おれのような人間にんげんでも同じおなように優しくやさしてくれる母親ははおやなんだ。

母親ははおやのように温あたたかく抱だいて包つつんでくれるんだ。

女神様めがみさまは一人ひとりの男おとこのものじゃない。

俺おれのものでもあるんだ。そんな女おんなは

なかなか見みつからない。

やっと会あうことができたんだ。

だから俺おれのものにすると決きめた。

男おとこの方はどうでもいい。邪魔じやまなら殺ころしてしまってもいい。殺ころすことは簡単かんたんだ。刀かたなで命いのちを取る、それが殺ころすことだ。



もやった。もちろん一回いっぺんも負まけたことはない。

その試合しあいのなかで、二十回にじゅうかい以上俺おれの刀かたなと

正面しょうめんでぶつかり合あったのは

この侍さむらいだけだつた。この侍さむらいは

刀かたなの使い方がずいじょうく上手うまだつたんだ。

強こゝろかつたんだ。

俺おれだつて強こゝろい侍さむらいから奥おくさんを

取とつたんだから、気分きぶんがよかった。

嬉うれしかった。



俺は紐を切って、刀を渡そうとした。すぐに侍は立って口の中の木の葉

を取り出してから大きく息をして、刀をつかんだ。

試合の結果は言う必要もないだろう。

侍は刀を上手に使った。二十三回、

俺の刀と侍の刀が正面で

ぶつかり合った。そして

俺の刀が侍の胸を深く刺した。

二十三回、これは大事な点だ。

俺は今までに刀の試合を何百回



ところ、侍や金持ちは金の力や嘘の言葉で人を殺す。汚い、汚い。金をたくさん持っていて嘘をつくのが上手な者が、町のなかで一番強い者になるんだ。血も流れないし、命も取らない。しかし、そうやって金や嘘の言葉で殺された者はずっと苦しむんだ。体が死ぬまで、恥ずかしさや残念な気持ちなが長い間、心を苦しめるんだ。

刀で命を取るとどちらが悪いか、俺にはよく分からない。

多襄丸は番所の侍にそう言って答えて聞いているようでしたが、侍たちは早く話を進めるように言いました。

「分かった、分かった。どうして殺すことになったか、初めから順番に話

していくから待て待て。

一昨日の朝は女だけ俺のものにすればいい、男は殺すことはないと思つていた。だけど、あの街道では人が通るからだめだ。ずっと遠い山の中へ二人を連れて行って、そこで女を取ってしまおうと思つた。

どうやって二人を山の中へ連れて行こうか。俺は考えた。泥棒だつて頭を使わないとすぐに捕まってしまうからな。

しばらく考えて、俺は一人に近づいた。そして、できるだけ丁寧に話しかけたんだ。『あの、お侍さん、私は山で仕事をしている者なんですが、先日あの山のむこうで古い墓のような物を見つけたんですよ。どのぐらい古い物

その熱い光に刺されて死んでもいいと感じたんだ。他の女だったら足で蹴つてやっただろう。そして逃げてしまえば、侍と女がどうなつても俺には関係ないから男を殺さなかつたし、このように捕まったりもしなかつた。

だけどあの女の目の熱い光を見た時、すぐに男を殺そうと思つた。だけど紐で縛ったまま男を殺すのはよくない。紐を切つて刀で試合をしよう。俺が勝つのは分かっているけれど・・・男らしいやり方で殺そう。そうだろう、ここにいるお侍さんもそう思うだろう。

それで侍に言つた。

『どちらが生きるか死ぬか刀で決めよう』

苦しくて恥ずかしいことではあります。どちらかが死んで、残った方と夫婦に

ならなければなりません。どうぞお二人で決めてください。』

俺は驚いた。だけどもこの女と夫婦になれるんだ。よし侍を殺してやる

う。自分の妻がこんなことを言うなんて、侍はどう思っただろう。とにかく

くその時は、速くこの男を殺してしまおうと思った。

こんなことを言つて『やつぱり多摩丸はひどい奴だ。』と思うかもしれない

が、あの時あの女の目を見た者はきつと誰でも俺と同じように思っただけだ。

女の目は火が燃えているように熱く光ったんだ。その光は俺の胸を刺した

のかと思っただけらい熱くなつて痛かつたんだ。この女を妻にできるのなら、

ですがね。』とね。

二人は初めは黙つて歩いていったんだけど、

俺が侍だつたと聞くと、話に関心を

持ち始めたんだ。

『私は墓の周りをちよつと調べてみます。』

そうすると、土のなから古い刀や



お金の^{かね}ような丸い^{まるい}物^{もの}が^たくさん^{さん}出^でてきた^きんです^んですよ。

これはゆつくり調^{しら}べた^が方^{かた}が^いいと思^{おも}つて

土^{つち}や木^きの葉^はを掛^かけて置^おいてき^きました。

お侍^{さむらい}さん、もし興^{きょう}味^みが^おありなら見^みて

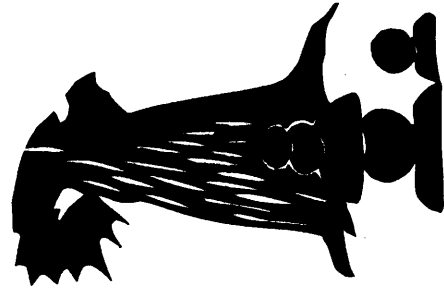
いただけ^くません^なかね。勉^{べん}強^{きやう}した

とい^いつても少^{すく}しだけ^{だけ}だし、

出^でてきた^き物^{もの}が^たくさん^{さん}あ^あつて一^{ひと}人^りでは

大^{たい}変^{へん}なんです^よ。見^みていた^いだいて、お侍^{さむらい}さん^がお好^すきな物^{もの}があ^あつたら、

持^もつて行^いつてもい^いいです^しね。全^{ぜん}然^{ぜん}た^ため^めなら私^{わたし}も諦^{あきら}め^めま^ますが^がね。』と。



「俺^{おれ}が走^{はし}り出^だそう^とすると

急^{きゆう}に女^{おんな}が俺^{おれ}の手^てを取^とつて言^いつた^んだ。

『待^まつて^くだ^さい。私^{わたし}をこ^こに

置^おいて行^いか^ない^で下^{くだ}さ^い。

お願^{ねが}い^はす。あ^あな^なた^た様^{さま}か主^{しゅ}人^{にん}か

ど^どち^ちら^らかこ^ここ^こで死^しん^でく^くだ^さい。

私^{わたし}が一^{ひと}人^りの男^{おとこ}の^{もの}にな^なつた^まま^までは

生^いきてい^いく^くこ^ことは^はで^でき^きま^ませ^せん。

こ^この^まま^ま生^いきてい^いる^るこ^ことは^は死^しぬ^ぬよ^り



の葉が口の中に入っているから何も言えない。殺さないうで侍の妻を取ることでできたんだ。これで俺の欲しいものは手に入れた。もうこの二人に用はない。すぐに林の外へ逃げようと思っただよ。」

「ここまで多襄丸はとても速く話していましたが、急にゆっくり真面目な顔になって、黙ってしまいました。その時のことを

ちよつと思ひ出して考え込んでゐるようです。

「ううん、俺はなんだか女がよく

わからなくなつてしまつた。」と言つて

また、多襄丸は話し始めました。



俺がそう言つて、あの侍はとても興味を持つたようで、一緒に行つてみようと言つた。ほい、人間なんて皆同じぞ。金になることが嫌ひじやないんだ。きつと心の中で汚い男をだまして、価値のありそうな物をいただいて、京都で高く売つてやるうと考へたんだ。

そうなれば後は簡単。俺は侍と女神様と一緒に山の中へ連れて行つた。山道の途中まで女は馬に乗つて行つたんだ。

だけど、竹の林の所まで来るともう馬は進めない。竹がたくさんあつて道もないんだ。それに屋でも暗いから女は気持ちが悪くなつたんだろつ。

『私はこゝで待ちます。どうぞお二人で行つてください。』

女おんながそいうと侍めむらは、

『そいうしなさい。ここで待まちつていなさい。できるだけ早はやく戻もどるから。』と言いうんだ。俺おれもその方ほうがいいから黙だまっていた。

侍めむらは女おんなをここんな所ところに一人ひとりで残のこして危あやなくないのか、なんて考かんえてもい
ないようだった。どすんどん進すすんで行いくとするんだ。

ここは俺おれの庭にわのような所ところだ。侍めむらはももう俺おれにとつて捕つかまえた手ての中なかの鳥とりの
ようなものだ。二に、三さん十分じふぶんも歩あるくと、竹たけが少すくなくなつて背せの低ひくい木きや草くさの所ところ
に出でた。

侍めむらはまだなかと聞きくようにここちらを見みた。

何回なんかいも、何回なんかいも俺おれを刺さそうとするんだ。

今いままで女おんなが俺おれに向むかつてきたことななんかなかつた。

どうしたつて俺おれに勝かつことななんかなできないのにさ。

朝あさには女めがみ神がみのように優やさしかった顔かおが、今いまは怖こほい女おんなの地じ獄ごくの神がみのようだ。

だけだけ、俺おれが女おんなの手てから刀かたなを取とるのは簡かん単たんさ。あつと言いう間まに左ひだりの手てで
女おんなの両方りやうほうの手てを押おえてしまつた。俺おれの手てを離はなそうと動うごけば動うごくほど、女おんなは
自じ分ぶんの手てや肩かたが痛いたくなるんだ。それそれで今度こんどは大おおきな声こゑで何なにか叫きけんでいたんだ
が、気きにもなならなかつた。

そそうしてついに侍めむらの見てみている前まえで女おんなを自じ分ぶんのものものにしたんだ。侍めむらは木き

けれど、気にもしないで進んだ。

ただし、あの場所まで来て

自分の夫が杉の木に

縛られているのを見て、

すぐに何かあったのか

分かったんだらう。女神だった

はずの女は胸の所に

隠していた小さい刀を出して、俺の方に向かってきた。

俺は簡単に横に逃げただけど、女は

俺は『そうです、もうすぐです。あの杉の木の下あたりです。お墓がある

のはあそこです。』と言った、侍は走って杉の木の下へ行った。『墓はどこ

なんだ。』と見回して俺のことを注意していない。

俺は侍の後から近づいて、両方の腕を

捕まえた。侍は急に後ろから抑えられて

腕を取られたので、何もできない。

あつと言つ間もなく杉の木に侍の

体を縛り付けてしまった。

俺は泥棒だからいつでもこの紐を



持っているんだ。金持の家に入る時

高い壁を登らなければならないし、

家の中で高そうなものを探したり、

盗んだりする間、家族の者達を

縛らなければならないこともある。

大きな物を盗む時には

運び出すのに紐が役に立つしな。

侍は、突然縛られて何がなんだか分からない。

『どうしてだ、どうしてこんなことをするんだ。嘘をついたのか。なぜ、



なんだって嘘をついたんだ。』と叫んだ。

俺は『どうしてだって。すぐにわかるさ。ちょっと待っている。』と言いな
がら、大声が出せないように侍の口に木の葉をいっぱい押し込んだ。こん
な林の奥でも誰かが近くを通ることもあるからな。」

「そうやって、俺は女の所へ戻って言った

『御主人が急におなかが痛くなって苦しんでいる。歩く事もできないよう
だから来て見てあげてくださいよ。急いで、急いで、こっちですよ。』

女は暗い林の中を一生懸命走って俺について来た。俺が泥棒だなんて
全然思ってもいないようだ。何回も転んだり、木の枝が顔に当たったりした